

---

# 学園内最強組織

飛樂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学園内最強組織

### 【著者名】

N1925N

飛楽

### 【あらすじ】

誰も顔を見たことのない生徒会。事実上椎名学園の最高機関の彼らは、学園にのさばる麻薬売りを相手にする。\*なるべく早めに終わります

夏休みも終わって間もない真夏の午前中。まだ一校時目だというのに、

生徒の目に活氣はない。

授業の内容をメモしては、手やひのこやうで自分に風を送つている。

「あ、じゃあいい。そうだな。木村。解いてみる」

「はい」

### コツカツコツカツ

黒板にチョークのあたる音だけが教室に響く。

やがて音がやむと、木村と呼ばれた男子生徒は自分の席へと戻る。「ん。木村、正解。応用だつたが、よく解けたな」

おっさんに褒められてもうれしかないよ、といつよつといじつと机を見つめる木村。反応がないのを攻めもせず、次に進もうと教師が参考書に目を

落とす　　と、

キーンコーンカーン

「起立」

「礼」

学級委員の呼びかけが教師の行動などびりともいこといつ調子で、強制的に授業を終わらす。たぶんどんな行動よりも素早いだろい。

教師もそそくさと荷物をまとめると、さっさと教室を後にする。邪魔者のいなくなつた教室では生徒たちが仲の良いグループでおしゃべりに花を咲かせる。

「おい和人。何でお前さつきの問題解けんだよ

「なんで解けないんだよ」

背が高く大柄な、いかにもスポーツをしてますといった感じの少

年 梅

宮翔は、ついさっき問題を解いて見せた少年の机に両手をついた格好で言ひ。

「まず俺の質問に答えてくれ」

「……あれくらいなら入試レベルだよ。」この高校の

少年 木村和人は呆れて返すが、実際さっきの問題は正答率の低かつた

入試問題なので、解けなくとも不思議ではない。簡単に解いて見せていると

ころをみると、頭のいい部類なのだろう。

「入試……そりや解けないわけだ」

「しょう・・・・・どうやってこの学園入ったの？」

椎名学園。それがこの高校の名前だ。

レベル的には中の上くらいだが、私立というのもあって甘く見てくれる

ため結構人気のある学校だ。

校舎は北と南に分かれ、北は4階建てに1・2年生が、南は3階建てに

3年生と特別教室と割り振りされていた。

敷地もそれなりに広く、アリーナやプールに広大なグラウンド、寮や部室棟などの設備も整っている。

そして、この学校には一つ、大きな謎がある。

「あ、そうそう。例の事件で生徒会が動きだすらしいぞ」「事件？」

「ほら。2年の森先輩が麻薬やつてんの見つかって奴」

「ああ。たしか売りさばいてる奴が学校にいるつてんで大騒ぎになつたん

だよね？」

「知つてんじゃねえか。で、本題なんだけど、ほら生徒会つてだれも顔し

らねえじゅん？それが動き出すのも珍しいしさ。だから教師たちも結構あ

わてるみたいよ？生徒会つて教師もぐびにできるらしいから。」

「ふうん。別に俺ら関係ないし」

この学園での最高機関は、教師でも理事長でもなく生徒会。詳しく述べると生徒会の中でも生徒会長、生徒副会長男女が実権を握つて

いる。特異な制度だが、もつと特異なのが彼ら3人の姿は、誰一人としてみたことが無いといつことだ。例えて言つと、王様がいないのに指示の出される王様ゲームのような状態。

学園に入った頃はその実態を知るうとする者もいるが、しばらくすると誰も気にとめなくなる。それが普通になつてしまつのだ。  
まれに、翔のような物好きもいるのだが、

と、翔が後ろを向いたままにやけている。

「……翔。キモイ」

「みろよー岡本美香先輩だよあれー3年の。ちよ 美人で頭もよくて運動も

できるつていうちょ 優等生！しかも性格も最良！ついでにナイスバディー」

教室の前の廊下を通る女性を親指で指し、和人に語り続ける。

「……」

「おい。和人？」

「物好きだなお前はほんとこ

「うるさい」



バゴツ

「和人、翔いる　　？あ！いたい！」

教室のドアに強烈な一撃をくらわし二人の元にやつてきたのは、同じ1・5の女子、畠 莉緒である。

それなりの身長を持つが、顔が幼いため『ちょっと背の高い小学生』と言わても信じてしまうような見た目の彼女は、二人の数少ない、小学生のころからの友人だ。ちなみに和人も彼女に負けず劣らずの童顔である。

中学、高校と上がっていくにつれて会話は減ったものの、なにかあるとほかの女子よりも先に一人の元へ来るくらい、親密な仲になっている。

そんな彼女が今日、二人のもとへやつてきたのは、ある重大ニュースを入れたためだった。

「どうかした？ そんな慌てて」

「元気の良さはいつものことだかんな。お前は」

「ニュースよ！ 重大ニュース！」

「ニュース？ あ！ 分かった！ テスト延期の話だろ！ そんなこともう知ってるぞー」

「それ昨日みんなに話したし、ニュースだなんて持つてきたりしないよ」

ふざける翔を和人が冷たくたしなめる。

「ん？ ジャあ担任の春日が結婚した、とか？」

「え！ うつそ！ あの顔で！？」

「嘘だけど？」

バンッ

本気で信じてしまった恥ずかしさと、眞面目に話を聞く気のない二人へ対しての怒りを込めて莉緒は思いつきり机をぶつたたく（前

者の方がわざかに大きい)。

「聞け」

「「ハイ」」

返事を聞くと莉緒は真顔から元の『ニュースを持ってきた』という自信満々の笑みに戻り、本題を切りだした、  
「あのね

「番長！抜き打ちで持ち物検査するつてほんとですか！？」

学校の敷地内でもなかなか目の届かないような、左右と後方を学校の壁で囲まれた日かげの場所。どくだみなどのじめじめした場所を好む草花の生息する不良のたまり場だ。

そこには男女含め、総勢20名ほどがたむろっていた。中には今日一度も授業に出ていない者までいる。

その中で番長と呼ばれた細身の少年は短く、質問への返答を返す。

「ああ」

彼の名は青野時雨。細身で背も高く、凛々しい顔立ちの彼はまるでモデルのようだ。しかしこの通り、不良の番長なんかをしていつも不良仲間と一緒に、女子からは畏怖の目で見られ、スカウトの大人なんかは一度近寄ってきても、すぐに離れていく。

本人としては、そういう職業を目指すわけでもないので、どうでもいいことだが、女子が離れていくのも彼からみれば特に気するところではない。

「まさかお前ら、薬物とか持つてねえだろうな？」

「まさか」「不良つったって最低限のルールは守るつて」

「金の無駄」「でもかばんの中はちょっとな……」

「なんだよお前。まさか好きな子の写真でも入つてんじゃないの」

「そつそんなこと…ない…です…」「え？ 図星」「嘘…悪気はないのよ？」

脱線していた会話を青野は元に戻す。

「とりあえずそつちの心配は無しな。でもやっぱおれもやだな。

持ち物検査。」

「なに入ってるんです?」

「DS」

「……番長らしげいつか、なんつか」

「俺らしげてのはなんなんだ?」

「ちなみにどのあたりの?」

「初期だぜ、初期。発売日に電気屋のいっし番前に並んで手に入れ  
たんだぜ。すげーだろ。まだどこもおかしくなってないぞ」  
「いろんな意味です」  
「武勇伝を語るが、子分達は半分呆れて聞  
っている。

「なんのソフトはいってるんすか?」

後方から男子生徒が手を挙げて尋ねる。

「なんだつたかな。みてみるよ」

「うと青野は横に置いておいたバッグからDVRを取り出すと近くに  
いた子分に手渡した。

カチッ

独特の音を立てて現れたソフトのパッケージを見て、一同は啞然  
とする

水色を地に、白のようなベージュのような色で犬のシルエットが  
描かれている。このソフトは……

「『ニンテンドッグス』……番長。これって……?」

「ああ。妹から借りたら結構面白くなつてな。いいぞ、犬。かわいい  
彼はとってもユニークな人間であるということを、彼らが改めて  
実感した瞬間だった。

2 (後書き)

続きます

集会での持ち物検査も終わり（新たに見つかったものはいなかつた）、部活のあるものは部活へ、無いものは帰路につく時刻。そんな騒がしい中、一階の西の最端に位置する生物準備室には、三つの人影がある。

「はい。分かりました。」協力どうづく

高めの少女の声が響く。

少女は耳にあてていた携帯をそっと放すと、ぱたんと閉じた。そして、あの二人に向き直る。

「彼は一年の『烟』という女子から買ったそつよ」

「！？」

「どうした？ 知り合いか？」

透き通った声の少年が、いぶかしげに隣の少年を覗き込む。少年は苦虫をかみつぶしたような顔を無理に戻して言つ。

「まあね。で？ 他に何かなかつたの？」

「彼女の上に、もう一人いるみたい。直接売買してるのは彼女だけみたいだけど」

「そうか……じゃあ僕が彼女を見張るよ。彼女の近くにいても、僕ならおかしくない」

「そういえば一緒にいたわね。じゃあそういうことで」

少女は言つとさつさとその場を後にした。残された少年たちは、あの性格をどうしたものかと思案するが特段いい思い付きもなくそれぞれ帰路につくことになった。

巨大なビルの合間に昔ながらの商店などがちらつく通りを、少女　　畠莉緒は歩いていた。彼女の家大通りから少しそれ

た場所にある。

と、バッグの中から携帯特有のバイブ音がするのに気がついた。慌ててバッグの中から取り出し、画面を見ると、ハッとしたように近くの裏路地へと潜り込んだ。

「もしもし」

『俺だけど

「今日はどうもありがとうございました」

『いや。いつもためでもあるからね』

「用はなんですか？」

『いや、ちょっとしおりへ取引を中断してもうおつと思つてね』

『そうしようと思つてました。ですが、中毒になつてる人もいるので一気に買つてもらわないと』

『そうだね。じゃあ閉店セールついてことで明日売買するつて伝えとくよ。密ひそかに』

「閉店？」

『休業。かな?ま。とつあえずそいつこいつひととだ』

「わかりました」

莉緒は携帯を閉じると元の道に戻つて再び歩き出した。

自分をつかむものに会話を聞かれていたとは全く気がつかず。

### 3 (後書き)

たぶん、次で完結です。

次の日の昼休み。

人気のない校舎裏の一角、いつもは不良どものたむろっている場所に少女の姿があった。手には携帯を握りしめ、緊張した面持ちで、きょろきょろと辺りを窺っている。

少女 畑莉緒は、一人、誰かを待つ。  
と、遠くの方に人影が見えた。莉緒は目を細めて確認し、驚愕する。

そこにいたのは担任教師の春日。  
この面子に一人は戦慄する。

「そろつた？」

一人はそろつて声のした方を振り返った。そこには三つの学生服。二人ともその全員に見覚えがある。

「和……人？え？なんで」

「生徒、会……」

春日に言われ、莉緒はその事実に気づく。そして驚愕をも飛び越えた驚きに、言葉を失つて膝をつく。

「メール。見ましたよねえ？」

向かつて右にいた、ひときわ背の高い男子 青野時雨が涼しげな声で問う。

「たしか、『あなたたちのしていることを知っています。詳しく聞きたいなら今日の昼休み、不良のたまつているあの場所で』っていうメール。送つたわ。時雨が」

今度は向かつて左側から清らかな高めの少女の声が響く。少女 岡本美香は悠然とした態度で、へたり込む少女を見下ろした。「来たつてことは聞きたいんでしょう？お望みどおり、話します。この前見つかった人から、莉緒の名前を聞いたんです。だから、僕は手掛かりを探すため、後をつけた」

向かって正面にたたずむ少年 木村和人、否、生徒会長はわずかに悲しい面持ちで、語り続ける。

「そして、昨日のあの電話を聞いた。もちろん莉緒の声しか聞こえませんでしたけど

「待て待て！その電話の相手が俺だと…？」どうしてそう言い切れる！相手の声は聞こえないんだろ！」

「莉緒は『今日はどうもありがとうございました』って言つたんだ。それって、昨日の持ち物検査でしょ？担任が検査したからね。莉緒の持ち物に薬物が入つて立つてあんたがいいて言えばなんの問題もなかつたことになる。それであんただなつて確信した。結構前から莉緒の近くで見たこともあつたしね」

「そんなのただの推測だろうが！」

「そうやつてむきになつてる時点であんた、自白も同然だつて思わないの？」

美香が冷めた視線を大人げない教師へと向ける。その纖細な容貌には、明らかに呆れの色が混ざつている。

「ハ、ハハ。これで教師生活も終わりだな」

「生徒に変なもん売つといいて、教師も何もねえだろうが」狂乱する教師に、不良の少年は冷たく、正論を言い放つた。普通なら逆の立場だが、それを疑問に思う者などいない。

今、一人の教師と、一人の少女の日常が、崩れた。

エピローグ

「まさか……な」

「うん」

「寂しくなるな」

「うん」

日常の中には一人の男子生徒。和人と翔は今回の事件で失った友人を思っていた。いつも一緒にいるのが当たり前だと思っていた友人の、突然の消失。しかも犯罪に手を出して。二人のショックは相当なものだった。

「…………」

「待とうよ」

不意に聞こえた、明るい親友の声に、翔はうつむいていた顔を上げる。

その先にあるのは、柔らかく笑う、親友の心強い顔。

「絶対すぐ帰つてくるって！莉緒自身がやつてはわけじゃないし。まあどのくらいの罪かなんて知らないけどさ」

「和人……」

大親友に元気づけられて、翔も笑う。

「そうだなー待とう！」

今日も日常は平和に流れていく。

#### 4 (後書き)

完結です。  
ありがとうございました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1925n/>

---

学園内最強組織

2010年10月10日10時23分発行